

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	小山 満
論文題目	仏教図像の研究—図像と經典の關係を中心に—
<p>審査要旨</p> <p>インドで生まれた仏教ならびに仏教美術はパミールを越え、タクラマカン沙漠の周辺に達し、さらに中原へとすすみ、漢族に受容されると、中国南北朝時代には中国伝統の漢文明で包み込まれた中国仏教美術が成立し、中国各地に石窟寺院や仏教伽藍がつけられた。この中国仏教美術が朝鮮に伝播し、さらに古代日本へと伝わったのである。</p> <p>小山氏の研究は、仏教の伝播とともにアジア各地でつくられてきた仏教美術の現存遺例をもとめ、その仏教図像と經典との關係を明らかにしようとしたものである。つまり、仏教図像を經典によって解明しようとしているのである。しかしながら、従来より仏教美術の研究方法としては美術作品の様式研究と文献史料の研究を合わせおこなうのが一般的であったが、小山氏の研究はアジア各地に現存する仏教美術作品が如何なる經典によっているのかを読み解くということに終始しているきらいがあって、問題がないわけではない。さらに仏教図像をある經典で読み解くということはもちろん誰もが試みるが、いささか強引で一方的な解釈もある。それでも經典にもとづく図像の検討による小山氏の研究は、他の追隨を許さないものがあるようだ。</p> <p>さて、小山氏の研究は三部からなる。第Ⅰ部「中央アジアにおける仏教図像と經典」、第Ⅱ部「中国における仏教図像と經典」、第Ⅲ部「わが国における仏教図像と經典」とあるように、仏教伝来の三地域にのこる仏教図像と經典との關係を検討する。</p> <p>第Ⅰ部の中央アジア篇は四章からなるが、ここでは初期大乘仏教經典と図像の關係を述べる。第四章『華嚴經』ヴァイローチャナ仏の関わりは、バーミヤンとキジル石窟の活動年代が通説の四～五世紀ではなく、六世紀に位置付けられることを考察し、これまでと異なる仏教東漸を提示した。小山氏は六世紀に当地を支配する初期突厥ディブザブロスの活動に注目し、その当時突厥が中国北齊と交流し、華嚴經典を学んでいることを根拠に、『華嚴經』の教主毘盧舍那仏（ヴァイローチャナ）のバーミヤン二大仏と北齊仏像との類似性を主張する。</p> <p>第Ⅱ部の中国篇は四章からなるが、ここでは中国の仏教図像を法華經や弥勒經典を中心に考察する。第一章曇曜五窟と『法華經』では、雲岡石窟の曇曜五窟にはいずれの石窟にも二仏並坐像が見出される点が注意をひくとし、『法華經』に宝塔が虚空に涌出し、中で多宝仏の大音声が聞こえ、釈迦仏の『法華經』の所説がすべて真実であると証明する場面につづき、釈迦仏が招き入れられて多宝仏と釈迦仏が並坐することが書かれているが、こうしたことから曇曜五窟の二仏並坐像は『法華經』と深く関わっていることは明らかという。否定はしないが、だからといってそのようにいわれると釈然としないものがのこるのも事実である。</p> <p>第Ⅲ部の日本篇も四章からなるが、ここではわが国の仏教図像を薬師經や華嚴經で追及していく。第四章法隆寺金堂四大壁画と經典では、昭和二十四年に惜しくも焼損した壁画を取りあげる。まず一号壁は従来指摘されていた『法華經』序品よりも『無量義經』によることを明らかにし、六号壁は観音の手印に注目し、これに関連する『観無量寿經』を検討し、壁面上の九品の衆生それぞれを特定する。九号壁は左端に描く執金剛神に注目し、薬師經の『薬師瑠璃光七仏本願功德經』を検討し、十二神将の半数が描かれているという。また十号壁では壁画に描かれた菩薩の頭冠などから、四菩薩、獅子座、五大神などと『観弥勒菩薩上生兜率天經』との關係性を述べる。先述のように、六号壁では九品の衆生それぞれを特定しているが、はたしてそこまで明らかになるものであろうか。</p>	

以上、小山氏は中央アジア、中国、そして日本という三地域合わせて十二章の研究の中で、仏教図像と経典との関係を一貫して、それも徹底して解き明かそうとする。小山氏の仏教図像の読み解きという点に一つの独自性を認め、本論文が博士（文学）の学位に相当するものであると判断する。

公開審査会開催日	2008年 1月 19日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学教授		大橋 一章
審査委員	早稲田大学名誉教授	文学博士	吉村 怜
審査委員	早稲田大学教授		肥田 路美
審査委員			
審査委員			